



町民文芸

只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一

指導

水成岩の白き切岸幾年も風化崩落止まらずに続く

角田 一男

晩秋に蕾持ちちるし石南花を雪に備へて丹念に囲ふ

馬場 八智

病癒えし身はためらはず五冊目の三年連記の日記帳買ふ

古川 英子

東京で娘の好物の鯨漬け教へし娘に聞きて漬け込む

吉津 政枝

年越しの夕餉に添へし風習のお平に込めし思ひめぐりぬ

関谷登美子

未だなき大災害の続きたる多難な年も雪に暮れゆく

渡部ゆき子

震災後来たる神楽は舞ひ終へてわが心付け受けず去り行く

目黒 富子

唐突に坐骨神経痛病みて足を引きつつ朝刊配る

五十嵐夏美

年末に帰郷の娘を鬼怒川に迎へしが通る車少なし

渡部ヨリ子

ながき雨漸く止みて晴れわたる秋晴れの下鉢植多囲ふ

新国 洋子

(出 詠 順)

只見俳句会

一月例会

目黒十一

指導

七種に足らぬ七草うつくしき
初戒銘銘皿は会津塗

礼

水泉活け見てをる猫が顔洗ふ
千両の鉢を携え友見舞う

邦 夫

遠ざかる尾燈見送る雪の道
明けやらぬ窓に除雪の警戒燈

又壹歩

買初や指で尺とる夫婦箸
寒空や鶏小屋ほどの新天地

笑 羊

この村に漸く馴れし頬かむり
牡丹雪睫にかかる重さかな

一 灯

冬木立ふつときえたる人の影
菜を洗ふまろき背中に小雪消え

康 女

底冷えし東京の朝皆無口
新聞の冷たき重さ今朝ひとさわ

修 一

年の礼親に似し子に思ひ馳せ
子供等はスノーモービル橇の客

リウコ

水底に音をしずめる冬の川
女正月おとこ料理の寒ねりぼう

恒 夫

お年玉中身は何と知らぬ顔
書初や右に左に火の用心

都

鮎漬^{ほっけ}今が食いごろ女正月
ほほえまし玉山崩る年始酒

吉 児

標のさしむ音行く宮の道
各の精霊鎮め山眠る

洋 子

室の花小さく畳む車椅子
降り積る雪に見送る友の影

邦 男

農業を継ぐかと問いて屠蘇を酌む
にしん漬けお平も供へ歳徳神

一 穂

冷厳なしぶき氷や猪苗代
天に地に鳴くや櫓の初鴉

隆 堂

天気図は冬型となりつつこ編む
豪雪や村湯温泉休みと云う

敦 子

天に地に鳴くや櫓の初鴉